私の保育

畔柳美代子

市街地より東へ五キロ、高層ビルのマンション、赤・青の屋根の団地近くに、幼稚園がある。幼稚園の西方には、約八千坪の広場があり、四分の一は草原である。しかも、この草原は、運動場と地続きで、園児が自由に行動できる。

春は、クローバーの甘い香りにつつまれて四つ葉探し。夏は、湿地帯でのおたまじゃくしの卵みつけ、蛙と共に蛙飛び。秋には、ハサミ草の上に寝ころがって、空想にふけったり、バッタ、コオロギと夢中になって、かけっこ。冬は、風に向かってのマラソン。

こうして、恵まれた自然の中で思いきり遊び、自然に親しんで生活する子どもたちの目と心にふれてハッとさせられる日々を送っている。そんな保育のひとこまを述べてみたい。

○

この花なあーに

「ワァー」と、子どもたちは草原を駆ける。「私、幼稚園に来る道でこの花見たことあるわ。これタンポポの花だ

よ」と、私の腕をグイッと引っぱって、他の友達の方へ私の視線が行かないようにのぞきこんで早口に話す。「そうよ、よく知ってるわね」と、頭に手をやり、それからタンポポを手渡した。M子ちゃんは、ニコッとして「この花なあーに、この花なあーに」と言いながら走っていった。

M子ちゃんは、入園当初、お母さんと離れる事ができないで、私や母親を手こずらせた。きっと登園途中に咲いているのをみたり、摘んだりなどして、母親から教わったのだろう。母親と手をつなぐM子ちゃんの表情と母親の気持が察せられる。このタンポポによって、友達といっしょに生活できるように育ってくれたM子ちゃんを、しばしの間、目で追いかけてみる。

首飾りできたわ

私が、レンゲやタンポポを摘んでいると、いつのまにかN男君がそばにきていた。（N男君は、保育室の中でもいつも帽子をかむり、小さい口をキリッとむすんで、友だちの遊びを傍観している。誘いかけると、ジッと私の顔を見つめて、気になる子どもである）

オヤッと思いながらも、何も声をかけずにすわって、レンゲ摘みを続けた。N男君もすわって摘みだした。と、だんだん私に近づいてくる。とうとう私の膝に片肘ついて摘み始める。私はびっくりして、「N男君も先生といっしょに摘もうね」と、声をかけようとしたが、この状態がこわれてしまいそうな気がした。ふと、いつものN男君の顔が目に浮かんだからである。

思いきって「ホラ、首飾りができたわ」と言いながら、N男君の首にかけると、さっと立って、私の顔をみて「ありがとう」と言ってくれた。私は思わず、いつもと違う顔をしているN男君を両手で抱きあげた。心の中では、今までの自分をふり返っていた。子どもとふれあう中で、子どもの心をつかめないでいる自分のいらだちを、恥じた。今日の活動をとおして、大切なことをN男君に教えられた。

おたまじゃくし、早くつかめー

たもやバケツを持って、ガヤガヤ、ワイワイ、中には、鼻歌を歌っている子どももいる。「先生、蛙たち、楽しそうに歌を歌っているね」と、自分と同じ心境を言った子ども

がいる。「本当だ。僕たちがきたから嬉しいんじゃない」「違うよ、おたまじゃくしつかみにきたから、イヤダ、イヤダと泣いているんじゃない？」と女の子が言う。

男の子は、〝よし、たくさんつかまえてやるぞー〟と勢いこんで嬉しそう。女の子は、つかまえるのが、かわいそうというような表情がうかがえる。それぞれの子どもの心がよくわかり返事に困る。

「オイ、おたまじゃくしは、水と泥の所におるぞー」「早くつかめー」と、男の子の声援のお陰で女の子もつかむことができた。

おたまじゃくしも並ぶよ

つかんできたおたまじゃくしをタライに入れ、「頭だけでピョンピョン泳ぐよ」「真直ぐ、スースーと泳ぐよ」と、観察しながら言い合っている。

「先生、並んどるよ!!」「どれどれ」と、私ものぞく。並ぶというよりも、おたまじゃくしが多すぎて、タライの中でひしめいているのだ。「先生、おたまじゃくしが体操やるもんで並んどるんだね」

想像力のたくましさと観察力のするどさに、ハッと思った。なぜ、おたまじゃくしと体操とを結びつけたのかわからなかった。運動場では、ハトポッポ体操をしている子どもたちがいる。私には、音楽は聞こえていなかったので気がつかなかったが、子どもたちは、今、つかまえてきたおたまじゃくしの動くようすと、ハトポッポ体操とを結びつけているのだ。もっと大きいタライに入れ換えましょうとか、おたまじゃくしが多すぎるなどと言わなくてよかった。

おたまじゃくしに足が出た

朝、保育室へ行くと、おたまじゃくしに足が出ている。誰が一番に見つけるか待っていると、案の定、朝、必ずのぞくS男君が見つけた。「おたまじゃくしに足が出たあー。オーイ、みんな、足が出たー。足が出たよー」と、まだ保育室へはいらないでいる子どもにも大声で知らせている。次に見た子どもが、「本当だ、足と手が出たー」と大騒ぎである。

私は、雨降りの日は、臭(くさ)いのでたくさんのおたまじゃく

しの飼育に閉口していた。それに子どもたちも、つかまえてきた日の喜びも、だんだん薄れてきていると思っていたが、足と手の出るのをじっと待っていたのだ。

それからS男君は、おたまじゃくしから蛙になるまでのT・P作りをして、O・H・Pで皆に紹介した。

もう、おたまじゃくしには興味はなく、他の遊びに熱中しているかと思うと、また、あるひととき、前にもどっておたまじゃくしに興味を示す。このような心情の変化や、関心のゆれ動きなど、よく見ぬけなかった。

かざぐるま、今日は、いいぞー

ハガキでかざぐるまを作って、まわそうと努力しているH男君に、「折り紙で作ったら」というと、「折り紙は柔かすぎるもん。フニャフニャになっちゃう」私は、どう助言していいのかまよった。ハガキでは作りにくそうである。「ハガキは硬すぎるし、折り紙は柔かすぎて困るわね。画用紙はどーお」ということばしかでなかった。

次の日、「今日は、いいぞー」と勢いよく、ハガキで作ったかざぐるまを持って外へ行く。昨日は、風が強すぎて思うようにまわらなかったのだ。今日の風は丁度いいと判断したのだろう。紙の厚さ、風の強さ等によってよくまわる事を何度も経験しているうちに、確かめられ、あの自信のある「今日は、いいぞー」になった。

望ましい経験と方向づけ等と、私たちはよく口にはするが、子どもの活動をじっくり見つめていくことがなによりも大切である。

給食と虫とり

ここ四、五日残暑が厳しい。登園すると、お昼まで虫とりに余念のないY男君。かけっこ、玉いれも大好きで元気に活動するが、ひとつだけ弱いところがある。それは給食のお肉が嫌いなのだ。でも、すでに食事がすんで外で遊んでいる友だちがいても、「もう、食べられないから残す」と決して言わない。時間をかけて食べる。早く虫とりに行きたいと思っているだろうと、かわいそうになる。

今日もY男君のいやなお肉の入ったおかずだ。仲の良いT男君が、何やら言っている。そのうちに、二人揃って食べ終り、ニコニコしてやってきた。「先生、T男君が、肉

を先に食べるといいよ」と教えてくれたと話す。「そう、それで早くお肉食べれたの」「ウンこれからそうするよ」と、たもを持って外へ出て行った。Y男君のあのさわやかな顔をいつまでも忘れることはできない。

友だちといっしょに虫とりがしたいという強い欲望から、まだ給食がすんでないY男君に、どうすれば早く食べれるか、T男君なりに真剣に考えた。ふと、『教育は、お互いである』ということばを思い出した。

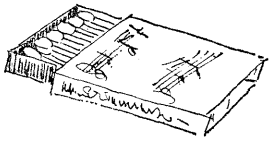
〝私の保育〟をふりかえってみて

もうすぐ二学期も終わる。

陽あたりのいいテラスに自分たちで作った木の家がある。その中に、女の子三人がすわり込んで、数珠玉を、糸でつないでいる。針に糸を通すこともうまくなった。「陽があたりすぎて、まぶしいでしょう」と声をかけても、振りむきもしない。

外ではプールが大賑わい。今朝は、薄氷りが張った。棒でピシャピシャ叩いては、「オイ地図ができた」「鏡だ」と騒いでいる。

保育室では、劇場ごっこが盛んで、見に行くと受付には案内人がおり、座席指定になっている。椅子の後ろに番号札が貼りつけてある。自分たちで作った劇を発表している。

子どもたちの明るい声を聞きながら、私は幸せだなあーと思う。自分にゆとりがなく、イライラしていると、この子どもの声が騒音に感じる。子どもと共に生活する幸福感を、いつも新鮮に受けとめられるよう、自分自身に子どもを受けいれる目や、心がなくてはならないと、自分に言い聞かせている今日この頃である。

（愛知・豊田市立東丘幼稚園）